

バイバイの実の倍加人間

さい

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ主が海軍に入って原作を荒らす物語です。

目次

第五話	17
第四話	14
第三話	10
第二話	5
第一話	1

## 第一話

俺の名前はリンスケ。

最近ラツキーなことに住んでいた家から少し離れたところに、悪魔の実を見つけたことができた。

凶鑑で見たとろろ 《バイバイの実》というらしい。

名前の通りパラミシア《超人系》らしい。

正直うちの家は楽しいとは言えるものではない。

今すぐにでも逃げ出したいぐらいだ。

悪魔の実を手に入れた今、プランができた。

- 1 海軍に入る
  - 2 海賊になる
  - 3 誰かに拾ってもらおう
- うーん・・・海軍だな

「なんだ？ここは海軍基地だと分かっているだろう？子供は入っちゃだめだ。」

案の定の答えが帰ってきたので、家がない、帰る場所がないから拾ってくれといったところ、

大佐にあわせてくれるらしい。

「俺が、この海軍第169支部の統括をしているトール大佐だ。」

「… リンスケです。」

「ではシンスケ。」

「リンスケです」

「ああ！そうか！はっはっは！すまんすまん！どうも最近耳が遠くてね…」

大佐も人が良さそうだ。運が良かった。

それからはいろいろ話をした。

家族の話や、自分のことなど。そして、

「君は悪魔の実を知っているかい？」

「ええ。僕も能力者ですから。」

「ちなみにどんな能力かな？」

「バイバイの実だと思っています。家を出る少し前に食べました。」

「へエ… 倍加人間か…」

「能力はすこし使ってみましたかげっこう汎用性が高い能力ですね。」

「実際に使ってみてくれないか？」

「分かりました。じゃあこのモップを使わせてもらいます。掃除《速

度・3倍》」

「おお… 早い！」

「ふう… これでいいですか？」

「ああ… こりやすげエ… ありがとう。君は採用、だが…」

「やっぱり年齢ですか？」

「ああ。あと1〜2年はあるな。」

「それまでは雑用で雇ってくれませんか？」

「それなら大丈夫だと思うが、大変だぞ？」

「大丈夫だと思います。能力でどうにかできるので。」

「分かった。じゃあ頼んだぞ。」

「はい！」

1〜2年後

あれから俺は雑用をするのと並行して修行を始めた。  
具体的な内容としては、

- 1 基礎体力の強化
  - 2 六式と覇気の習得と上達
  - 3 能力の強化
- この3つをしてきた。

まず1の基礎体力の強化は、並大抵の海兵は余裕で勝てるぐらいには鍛錬を積んだ。

そして、2の六式と覇気は習得。コツはふらつとここを訪れたガープ中将に教えてもらった。

彼曰く

「才能があるガキじゃ!!」  
らしい。

最後の3は一番力を入れた。結果、上限500倍、下限500分の1倍まで倍率を調整できるようになった。

方法は、まず《修行効率・2倍》をして、能力を伸ばす。そして3倍まで上限が上がったら

《修行効率・3倍》で能力を伸ばす、という工程をそれぞれ2000倍と2000分の1倍になるまでした。最後らへんは楽だった。

もう1つ成果があつて、この能力、複数個の能力の倍率を調節できるらしい。

ということ、3つ、同時に倍率を調節できるようになった。

この能力を使って修行を積んでいったら俺はハイスペックの肉体を手に入れた。

「どういうことだ…」

「まあ頑張ったんで」

「頑張ったでいける領域じゃないだろツツツ!!」

「それより、次の任務から連れて行ってくださいよ!」

「わ、分かった…」

## 第二話

あれから俺はトール大佐の推薦で本部に行くことになった。  
「どうも。新兵のリンスケです！よろしくおねがいます！」  
「お前の噂なら聞いている。軍教官のゼファーだ。よろしく。」  
「ゼファーさん！よろしくおねがいます！」  
「どうやらこの人が俺を鍛えてくれる教官らしい。  
目標は大将！頑張るか！」

### 訓練所

「ハアハア・・・」

「そんなものかリンスケ!!遅い!!」

「そんなのこれのせいだろ!!」

挨拶が終わってすぐ訓練が始まったんだが、さっそく海楼石とやらの腕輪をつけられての手合わせ。(海軍専用)すこぶるしんどい。それに教官が六式を使ってもそれ以上のスピードで攻撃をしてくるため、そもそも体が追いつかないから見聞色でも回避が難しい。

それから少し

「ハアハア・・・ようやく終わった..」

「たったの30分だぞ？それに刺のスピードも足らんな。基礎能力が低いから地力を上げて能力の幅を伸ばさなければな」

「なるほど……」

「というかお前本当に新兵か？」

「まあ一応……」

「ちよつとまっておけ。」

何をするつもりなんだろう……

ゼファー視点 元帥室にて

「コング元帥。この新兵のリンスケ。先程早速訓練をしたんですが、新兵の実力ではありません。もつと地位を上げるべきではないかと思えます。」

「うーむ……ゼファーが言うぐらいなのだから相当な実力なんだろう。」

「ええ。能力者で、内容が基礎能力依存で身体強化をできるよう……」

「強力で単純な能力だな。よし、それなら半年ぐらいたったたらネイキッド中將に預けてみるか。」

「それからは私たちが彼を鍛えるということですか？」

「ああ、それで頼む。」

リンスケ視点 訓練所

「ということだ。リンスケ。お前はネイキッド中将の部下として半年働いてくるんだ。」

「は、はい。分かりました。」

「大丈夫だ。やつは温厚だ。安心していけ。」

「じゃあ、もう移動の準備ですか？」

「そうだ。あとこれ、腕輪の鍵だが、基本はつけておけ。これで日常生活も運動に変わる。」

「えー… 分かりました。」

この人がネイキッド中将か。聞いたとおり温厚そうだな。

「これからネイキッド中将の部隊に配属します、リンスケ三等兵です。よろしくおねがいます！」

「ああ、君がリンスケか。ゼファーから話は聞いた。これからよろしくな！」

「はい！」

甲板

俺はさっそくネイキッド中将の軍艦に乗って雑用をすることになった。

今は甲板を掃除している。

「それにしてもリンスケは働き者だなあ！」

「ありがとうございます！」

「期待できる人材だな！」

「精進します！」

平和だなくと思つた矢先、

「敵船！総員臨戦態勢に入れ！」

「海賊か！」

急な敵の襲来である。

ドオン！

【大砲!?】

「みんな危ない！伏せて！」

「!?」

「脚力、つて能力使えないんだつた。嵐脚！」

ポオン！

意外と海楼石あつてもどうにかなつた。

「あ、ありがとう。」

「お、おい、それどうやったんだ？」

「少し前まで大佐に稽古をつけてもらつたんです。」

「そ、そうか…。」

その後俺は中将に呼び出された。

「リンスケ」

「なんですか？中将」

「お前、六式使えるのか？」

「なんで知っているんですか？」

「さつき甲板の方から部下がお前が大砲を嵐脚とかいって吹き飛ばし

たと聞いてな。」

あーあれか。まアびつくりするよな。

「あーそうですね、」

「一応聞くが、覇気も使えるのか？」

「ええ。ある程度は。」

「あ、ああ分かった。ありがとう。もう大丈夫だ。」

「そうですか！では失礼します。」

リンスケが部屋から出ていった後、

「…………… 新兵のレベル上がってないか？」



翌朝

「ふう。よく寝た！」

やっぱり能力を使って寝るのは楽だな。体の調子がいい！  
それにこのコートかっこいいな…

「おはよう。よく眠れたか？」

「おはようございます！中将！」

「ああ。今日の手合わせは昼食後ってことでいいか？」

「ええ。大丈夫です。」

「じゃ、今日も頑張ろうか！」

昼食後 訓練室

ガヤガヤガヤ

「今日大将と昨日一気に少尉になったリンスケ少尉が手合わせするんだってさ！」

「俺はリンスケ少尉が勝つと思う！」

「いやいや相手は中将だぞ?」

「少尉まで一気に上がったんだ。座学と年齢が原因で少尉に残ったんだと思うが…」

「おい!お前等静かにしろ!2人が来たぞ!」

「ルールは簡単。場外に出るか、戦闘不能な状態になる、降参する、この3つのどれかを満たしたら負けとする!」

「OKです。」

「では始めるぞ!用意、はじめ!」

最初に嵐脚・10倍を放つが、簡単にあしらわれる。

その反撃に正拳突きを放ってくるが、鉄塊・100倍で簡単に受け止める。

そんな攻防が10分ほど続いた後

「ハアハア…これで決める!! 粉塵!!」

「ハア…うっ、回避が間に合わない!」

ドン!!

「……………!!」

バタツ…

「こ、この勝負、ネイキッド中将の勝利!」

「くそー!」

やっぱり倍率を上げれば負担も増えるな…

せめて100倍をノリスクで使えるようにならないと…

「ふう。大丈夫か?リンスケ。」

「はい。手合わせしてくださってありがとうございます!」

「ああ、大丈夫だ。」

「座学の時間ということで俺はステルヴィオ教官だ。お前たちの座学と訓練の両方を担当する。まずお前たちには最初に抜き打ちテストを行おうと思う。」

「聞いてないですが…。」

「事前に準備がどれだけで来ているか確かめろってさ…。」

「うーん…。まア大丈夫ですよ。」

「ま、満点…。」

「一応聞きたいんですけど、これで何がわかるんですか？」

「少尉になるための内容なんだが…。」

「じゃあ筆記も実力もいい感じじゃないですか？」

「ああ。そうだな。試験で結構時間も使ったから明日から座学も始めていくぞ。」

「はい！よろしくおねがいます！」

「すごいのお。テスト満点かー。」

「？君は…。」

「わっしは君とおんなじテストを受けた同期のボルサリーノ。階級は同じく少尉。よろしくなすって。」

「わしはボルサリーノと同じくお前の同期のサカズキじや。階級は少尉じゃ。よろしく頼むのお。」

「俺はリンスケ。2人と同じ少尉だ。よろしく。」

「仲良くねえ。」

## 第四話

「zzzzz……」

「おい、ボルサリーノ！起きとかなないと教官にぶっ飛ばされるぞ？」

「そうじゃボルサリーノ！！起きろ！！」

「そうなのか？ボルサリーノ……寝てんのか？テメエ……」

「ふあ……ん？い、嫌な予感……」

「座学中に寝るのは何回目だボルサリーノ!!!」

「っ！八咫鏡《やたのかがみ》」

「ちっ、お前の能力は便利だなあ……」

「危ない危ない……」

ちなみにこのボルサリーノの反応速度0・1秒、それからの教官の攻撃開始1秒、最後にボルサリーノの八咫鏡0・1秒

計1・2秒の出来事である。

「やっぱはえエなアボルサリーノの能力は！」

「とはいえおんしも目で追えてたじやろうリンスケ。」

「目では追いついても反応して行動するのは無理だと思っけどね」

「やっぱり自然系《ロギア》は便利な能力だなあ……」

「はあ……もう座学を始めて2時間たっていたか。じゃあ今日の座学はこれで終わりだ。」

「「ありがとうございます」」

「ふう。少尉になってもう1週間か」

「意外と早かったのお」

「そうだねえ」

「次は訓練か。移動するか。ところで2人はゼファー教官を知っているか？」

「知らないねえ」

「わしも知らんのお。」

「すげえ強くてさ、しごきがえげつないんだ。このブレスレットもゼファア教官が毎日つけろって言ったものだし…」

「さぞかしすごい人なんだねえ」

「そんなひとに戦いを教えてもらってよかったじゃないかリンスケ。」

ゼファア教官、まだ本部で誰かをしごいているのかな…ゾツ!!

「へガチャ」失礼します」

「おお、久しぶりだな、リンスケ。」

「き、教官…」

「この人が教官なのかい？」

「ああ。俺がゼファアだ。今日からお前たちの訓練の教官を務める。」

「ま、マジか…」

「なんだ、俺じゃ不満か？」

「いや、ゼファア教官のしごき、強すぎるんですよ…」

「それはお前の体力不足だ。」

「でも海楼石の腕輪もつけていたし…」

「なにか言ったか？」

「い、いえ、何も…」

「じゃあ、早速訓練を始める。訓練の内容は、お前たち3人と俺との“3対1”の組手だ。基本、能力は禁止、六式、覇気は有りとしよう。制限時間は今日は30分にしてやろう。終わる条件は俺がくたばるか、時間が30分経つかだ。お前らがくたばっても、終わりはせんぞ。誰かが倒れた時点で、タイマーストップ、3人共が戦える状態になったらまたタイマーを進める。」

「なんじゃその鬼畜ルール」

思わず本心を口に出してしまった。

「文句を言うな!!5分延長だ。」

「く、すみませんでした。」

「分かればいい。では1分後開始とする！準備しろ！」  
「はい！」

## 第五話

始まってしばらくたったが、もう限界が近づいている。  
能力を使うのもつらくなってきた。

でも教官が3人をそれぞれ狙うおかげでなんとか体力を持たせてきた。

「ハアツハアツ……」

「リンスケ！もうギブアップか!!まだ20分だ！あと15分あるぞ!!」

「攻めるよく！光蹴《こうしゅう》!!」

「甘い！ボルサリーノ！能力に頼りすぎだ!!神蹴・黒《しんしゅう・こく》!!」

「ボルサリーノっ！赤壁《あかかべ》！」

「バキバキバキッ！」

「まだまだ強度が足りん！サカズキ!!」

「ゴキーン！」

「ゲフツッ！」

「サカズキ！今行く！走力・2倍《そりよく・2ばい》」  
「……………」

「またダウンか!!タイマーストップだ!!」

「おい！起きろ！」

「うっ!!す、すまん、油断したのお。」

「ああ大丈夫だ。」

「次が来るよオ、リンスケ」

「なにっ！」

「黒雲《こくうん》！」

「鉄塊！」

「ゴン！」

武装色纏ってるのに容赦のない攻撃だなあ。

相当ダメージ入ったし。

「ガハッ！」

右を見たらボルサリーノが膝をついている。

「武装色の覇気が足らん!!」

やべーな…こんな終わる気がしない…

「つぎはリンスケだ!!連黒腕《つらねこくわん》!!」

「くっ! 国士無双《こくしむそう》!」

拳を拳で返していく。脚を脚で返す。3人で倒れたり起こされたり…

そんなことを繰り返して1時間後…

ピピピピッツ!

「鳴ったな。今日の訓練はこれで終わりだ。明日はもう少し時間を伸ばす。明日に備えてしっかり休めよ。」

「ぜえぜえぜえ…」

「明日もあるからな。」

「こーれやばい…」

こんなのを毎日繰り返していたら身が持たない。

だけど、大将に近づくためにはこれぐらいできないとなー

翌日

今日はやけに人数が多かった。2、30人ぐらいいた。

それにゼファー教官がいない。

「今日はゼファー教官じゃないんですか?」

「ああ。ワシはガーブ。今日はワシが訓練をつけちよるわ!」

「そうですか!よろしくおねがいます!」

「今日は2人で1組作ってくれ。」

「じゃあやるかのお。ボルサリーノ。」

「オーケー。」

あの2人で組むようだ。2人が組む以上、俺は誰と組めばいいんだ。： そんなとき、赤髪が特徴的な男が

「あ、あのー」

「ん？君もペアが居ないのか？」

「うん。一緒にペアを組んでくれない？」

「ああ大丈夫だ。名前は？」

「アクセル。」

「俺はリンスケだ。」

「よろしく。」

それから少し、全員がペアを作り終わったあとだ。

「よし、全員作れたようじゃな、今日するのは対人訓練じゃ!!」

「????」